



ベトナムの都市部でも、昔ながらの遊びをする子どもたちを見かけることが少なくなりました。急速な人口増加にともない、オフィスビルやマンションの建設が相次ぎ、交通量も増えたことで、子どもが自由に遊べるスペースが少なくなったことが大きな理由です。

そのうえ、インターネットでのオンラインゲームやゲーム機が外国から入ってきたため、ベトナムの子どもたちの遊び方に変化が表れてきたことも確かです。とはいえ、今でも子どもたちの間で愛されている昔ながらの遊びはあります。主な遊びをいくつかご紹介しましょう。日本でも、おなじみのものもあります。

子どもたちの遊び

トゥー・シー(じゃんけん)

ベトナムでも「誰が鬼になるか」を決めるときなどに行います。日本では「グー(石)」「チョキ(はさみ)」「パー(紙)」ですが、ベトナムでは「ブーア(槌)」「ケーオ(はさみ)」「バオ(包み)」で、かけ声は「1、2、3」。

ゴム跳びをする子どもたち



ベトナム語の「モツ、ハーイ、バー」ばかりでなく、英語で「ワン、トゥー、スリー(one、two、three)」もあります。ルールは日本と同じです。

トォン・ティン(かくれんぼ)

「トゥー・シー」で鬼を決めます。鬼は目隠しをして100まで数え、その間に隠れます。鬼に初めに見つかった人が次の鬼、というルールです。

ダー・カウ(羽根蹴り)

数人で輪になり、おもりのついた羽根を足で蹴ってパスするというシンプルな遊びですが、実際にやってみるとかなり高度な技術が必要です。この遊びの歴史は古く、紀元前5世紀の中国にさかのぼるといいます。学校の体育で習うため、校庭や休みの日に公園で遊ぶ子どもたちの姿もよく見られ

ます。羽根は一つ5000ドン(約20円)ほどで購入できます。

ニヤイ・ヤイ(ゴム跳び)

ベトナムの女の子に人気の遊びです。輪ゴムをつないで作ったひもを使います。特に、学校の休み時間や放課後に校庭で遊ぶ女の子たちをよく見かけます。男の子も参加できますが、「側転をしながら跳ぶ」など、男の子特有の跳び方があり、女の子よりも難易度の高い技術が要求されます。

ター・イエウ(風揚げ)

日本ではお正月の風物詩という印象もありますが、ベトナムでは日常風景としてよく見られます。ただ、都市部では風を揚げられる場所が限られるため、地方で特にさかんです。風はもちろん買うこともできますが、子どもたちは紙と竹を使って上手に工作し、自慢

日本と似たものも



公益財団法人国際開発救援財団(ファイダー(FIDR))

国際援助を行う民間の非政府組織(NGO)。1990年に設立され、東京に本部を置いています。ベトナム、カンボジア、ネパールで現地の行政機関や団体と協力して、貧困状態にある人々の生活を向上するために支援しています。日本では、岩手県山田町と大槌町を中心に東日本大震災の被災地の復興支援に取り組んでいます。98年にベトナム中部のダナン市に事務所を設立。

の風を揚げて遊んでいます。

バン・ビー(ビー玉競争)

地方の子どもたちに人気の遊びで、二つのビー玉を使います。地面に浅く穴を掘り、そこをめがけて手元のビー玉で地面に置いたもう一つのビー玉をはじきます。はじかれたビー玉が穴に入れば、そのビー玉をもらうことができ、最終的に手元に残ったビー玉の数で競います。(狩野ますみ)



羽根蹴りと羽根(左)

世界史の現場で

世界最大の建造物

【紀元前3世紀 万里の長城が本格整備】

中国

ロシア

インド

チェコ

北京

国名 中華人民共和国

首都 北京

面積 約960万平方キロ

人口 約13億4700人(2011年末、台湾、香港、マカオを除く)

現地通貨 1元=約13.4円

中国の北の方に、東西に延々と連なる城壁、万里の長城があります。中国の王朝は歴代、北方民族の侵入に悩まされてきました。春秋戦国時代(紀元前770年~同221年)に燕、趙などの王朝が城壁を築き始め、その後中国を統一した秦(紀元前221年~同206年)の始皇帝が本格的に整備したと言われています。

その後も、中国の歴代王朝は改修や増築を行いました。現在残っているのは、主に明の時代に整備された城壁です。明は、北方の女真族などを警戒して城壁を頑丈なものにしました。しかし、明は内乱の結果1644年に崩壊。女真族の清が長城を越えて北京に入り、中国全土を支配しました。

長城の長さは、6352キロとされていましたが、中国政府は2009年、西は甘肃省の嘉峪関から東は遼寧省虎山まで8851キロになると修正。さらに12年には、秦や漢(紀元前202年~紀元後220年)の時代に建設された部分などを含め、総延長は2万1196.18キロになると発表しました。世界最大の建造物と言われており、1987年にユネスコの世界文化遺産にも指定されています。



中国の首都、北京市の郊外にある八達嶺という場所では、長城にのぼることができます。険しい山の尾根に沿って築かれているレンガ造りの城は、高さ平均約8.5メートル、幅約6メートル。馬なら5頭が並んで通行できるといい、所々にのろしを上げるのろし台が設けられています。

実際に歩くときかなりの急勾配で、城を造った人やここで守りについた昔の人たちの苦勞がしのべれます。崩れかかったり街から遠く離れた場所も多いので、観光に行くには注意が必要です。【北京・井出晋平、写真も】